

# 都心部における高齢者の居方から都市を見る

—福岡市天神地区を対象に—

張 銘容

## はじめに

本研究は、筆者が福岡市内の街で活動する高齢者の姿から都市の豊かさを感じ取れたことをきっかけに、高齢者の活動と都市との関わりについて論考を展開したものである。平日の昼間に福岡の街を歩くと高齢者が若者のように生き生きと街を歩き、一日の多くの時間をそこで過ごす姿が見られる。台湾出身の筆者にはこのように元気に活動する高齢者の姿から、高齢者の元気な一面とともに都市の豊かさを感じ取れた。なぜ都心部の街で高齢者は元気に活動できるか。高齢者が都心部の街で活動することはどういうことか。都心部の街で活動する高齢者に焦点をあて、問いを展開し、高齢者の活動の姿から高齢者の活動と都市の関わりに対する理解を深めていく。

## 1. 背景・問題・研究構造

### 1.1 社会的背景

都市計画運用指針(国土交通省, 2016)<sup>1)</sup>において、高齢者の身体特性を踏まえた生活利便性の確保から、日常的な購買活動やサービス施設等は居住地付近の立地が望ましい望ましいとされる。一方で、高齢者の若返り現象や社会参加の可能性、高齢者の外出に対する肯定的な見解も見られる。高齢者の身体機能の低下は見られるもの、一般の成人と同様に外出し、一般に開放された繁華街や広い範囲で娯楽活動を選択している(中鉢, 1998)<sup>2)</sup>という見解もある。

### 1.2 研究背景

高齢者の外出に関する調査では、性別や年齢に関わらず高い割合で外出への意欲を示し、「日用品の買い物」「食事・社交・娯楽」目的の外出頻度が高い<sup>3)</sup>と示した。高齢者の外出行動に関する既往研究は、アンケート調査を用いた高齢者の行動特性を把握する研究や高齢者の外出先における空間使用状況を扱う研究が多い。また、高齢者の散策的余暇活動を8つの行動パターンに分類した宮崎・青木・上和田・船越(1992)<sup>4)</sup>の研究も見られる。いずれも高齢者の行動特性に基づいて公共交通や環境整備必要性が論じられているが、高齢者の外出行動と都市空間の関わりは行動と行動要求に対するデザインという対応関係だけではなく、高

齢者の行動から場所の質や意味を問うことも可能となる。一例として、橘・高橋(1997)<sup>5)</sup>は、相互浸透関係に着目して高齢者の日常生活地域の行動環境を比較し、行動環境の質の違いを明確にした上で高齢者にとっての地域環境の意味を考察した。

### 1.3 問題と目的

本研究は都心部における高齢者の活動に主眼を置き、高齢者の活動の意味、および活動と都市の関わりについて論考する。研究を展開するにあたって、「なぜ都心部の街において高齢者が生き生きと活動できるか」という素朴な問いをもとに「高齢者が都心部の街で活動することはどういうことか」という大きな問いを立て、高齢者が都心部の街で活動することについて明らかにしていく。

### 1.4 研究構造

「高齢者が都心部の街で活動することはどういうことか」という大きな問いをもとに、実際に高齢者が訪れる都心部の街においてフィールドワークを行った。フィールドワークを進めるなかで、研究課題 Q1 から Q3 を立て、関連研究レビュー、データ収集、検討の作業を繰り返し、徐々に研究課題を深めていった。順に形成した三つの研究課題をふまえたうえで、「高齢者の活動の姿および高齢者の居方を通して都市を見ることとは」という問いの焦点化をしていった。最終的に、都心部の街における高齢者の活動と都市との関わりについて総合考察する。

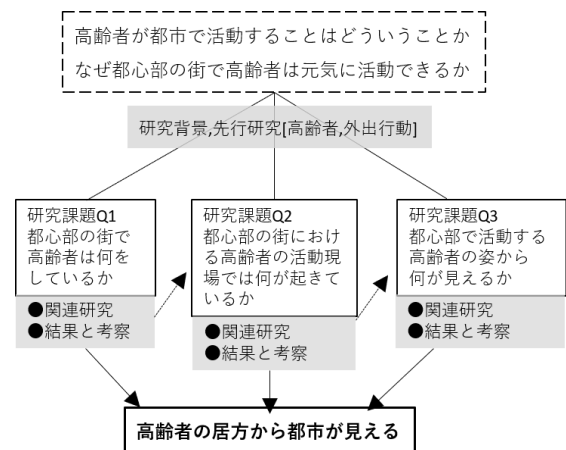


図1 研究構造

## 2. 研究方法

### 2.1 全体観察

研究課題 Q1「都心部の街で高齢者は何をしているか」を解明すべく、福岡市内にて 2015 年 5 月～2016 年 3 月に追跡調査と定点観察調査を行い、都心部の街を来訪する高齢者の活動実態の概況を把握した。福岡市の選定理由として、都心部の街の来訪者は二つの都心、天神・博多に集中的に流れ込む傾向があるため都心部の街を訪れる高齢者の姿を捉えやすい利点がある。研究対象者は 60 から 80 代の高齢者に設定し、特筆しないかぎり、対象者の年齢層は調査者の目測による推定とする。

### 2.2 焦点観察

都心部における高齢者実際の活動現場では何が起きているかを解明するため、2015 年 11 月～2017 年 7 月に都心部の繁華街天神地区焦点調査を行った。特に全体観察を通して見えた、活動のあいだに存在する見過ごされがちな出来事に着目して観察した。なお、研究課題 Q3 は研究課題 Q1 と Q2 の調査結果をふまえて考察するので、研究課題 Q3 において調査は行っていない。

## 3. 結果と考察 I

### 研究課題 Q1「都心部の街で高齢者は何をしているか」

#### 3.1 課題説明

高齢者が活動する都心部の街でフィールドワークを行い、実際の高齢者の活動の概況を把握する。高齢者の活動内容の他、活動をより詳しく捉えるために高齢者の持ち物や身なりに考察した。

#### 3.2 関連研究

宮崎ら(1992)<sup>4)</sup>天神地区を訪れる高齢者の散策的余暇活動を 8 つの行動パターンに分類している。しかし、高齢者がそこで活動することは何の意味があるのか、という本研究の問いには回答しきれない部分がある。

#### 3.3 結果と考察 まとめ

都心部活動する高齢者の姿からキャリーカートやリュックサックを手にする共通の特徴がみられた。これらの入れ物に持参の弁当や飲み物、防寒用具など都心部で活動するための持ち物一式を入れ、残りのスペースは都心部で購入した品物を詰め込む。荷物で膨らんだカートやリュックを手にすることから高齢者の「都心部の街を来訪し活動する」という心構えが見られ、高齢者にとって「都心部の街を来訪し活動する」が特別な意味を持つと考えられる。また、高齢者が「買い物」や「人と出会う」といった高齢者の一連の大きな活動から「明確な目的になる活動」と「明確な目的

にならない活動」二種類の活動を見出した。買物・人と会うという明確な外出目的になる活動に対して、談話・休憩・人や物を眺めるなど、事前に計画されてなく、明確な外出目的にならない活動も存在する。このような見過ごされがちである「明確な目的にならない活動」も都心部における高齢者の活動と都市の関わりを解明するうえの一つの手がかりとなると考えた。次章では「明確な目的にならない活動」に着目し、実際に見えた高齢者の活動場面について考察する。

## 4. 結果と考察 II

### 研究課題 Q2「都心部の街における高齢者の活動現場では何が起きているか」

#### 4.1 課題説明

本章では、都心部の街の高齢者の活動現場において、ありのままの活動場面から、都心部で活動する高齢者の姿を探る。研究課題 Q1 の調査結果から福岡市内において特に高齢者が多く活動する場所として福岡市天神地区を研究対象と選定し、そこにおける高齢者の活動場面に焦点をあてた。さらに、高齢者の活動と都市の関わりへの深まりとして、高齢者の活動と活動場所をむすびつけ、活動場面から見えてくる高齢者が活動場所に持つ意味を考察する。

#### 4.2 関連研究

ゲール(2006)<sup>6)</sup>の指摘によれば、公共空間における基本活動は他の活動の出発点でもあり、様々な活動のなかで重要性が低いようにみえるが、それ無しでは他の活動やふれあいも生じないことである。本研究が第三章の考察結果としてとりあげた「明確な目的にならない活動」は、ゲール(2006)<sup>6)</sup>が提示した公共空間における基本活動と類似する部分があると考えられる。これらの基本活動を「買い物」「人と出会う」といった複雑な交流活動と比べると、確かに重要性が低く見過ごされがちであるが、このような低い濃度のふれあい、ただそこにいだけでも生じる控えめな目と耳のふれあいも、一人でのとは違った体験を意味する(ゲール, 2006)<sup>6)</sup>。

#### 4.3 結果と考察 まとめ

・事例 1「見る」活動  
大丸食品売り場 2015.11.4 13:20-  
食品雑貨の売り場にて。帽子をかぶり左腕にカゴ持つ 70 代後半の女性。生鮮売り場より人気が少ないグロッサリー売り場をゆっくり眺めながら歩く。レトルト食品の前で立ち止まり、おもむろに洋風のスープを手にした。いかにも高齢者が飲まないであろうと私は考えた。女性はパッケージの表を一瞥し、裏返

して文字に指を添えて読み、また表にして見つめる。その間 5 分ほど、じっくりと読んでじっくりと考える。その後、商品を 1 つカゴにいれ、同シリーズの別商品を手にする。再び時間をかけて読み、表と裏を繰り返し見て商品をまた 1 つカゴにいれた。じっくり選んだ結果、女性は 3 種類の洋風スープをカゴにいれ、レジに向かった。



商品を手にじっくりと読み、慎重に選ぶ女性の姿から、女性なりに商品を吟味していることがうかがえる。一連のふるまひは、女性には単純な「買い物」や「商品を見る」だけでなく、「商品に興味を持ち、慎重にじっくりと考えを巡らせ、決断して購入する」という味わい深い買い物体験をし

図 4.1 事例 1

ているのであろう。この活動は女性にとって、目新しい商品を見つけては見比べるという醍醐味を味わう意味がある。多様な商品が並ぶこの売り場では、女性にこの様に刺激的な体験を提供し、商品購入以上の買物の醍醐味が味わえる場所となる。

・事例 2 「見知らぬ人と話す」

大丸地下休憩所 2017.04.19 13:20-

私が座っている席の二つ左隣に、60 代女性が手前のカートに頭と肘を乗せて居眠りしている。たまに顔上げ、周囲を見てはまたうつ伏せになる。私の左隣に 70 代女性が近づき、私に軽く会釈して座る。私もスマホから顔を上げ、軽く会釈し返す。私が前に目を向けると、左隣の女性が「すみません、今何時ですか」と聞いてきた。時計を見て「13 時半です」と答えると、女性は「ありがとう」と微笑んで言った。私はまた前を向いてぼーっとしていたが、時々左隣の女性の視線を感じる。チラッと女性を見ると、女性は通り過ぎる人々を目で追ってはまた前を向くことを繰り返している。何となく、女性が暇そうだなと感じた。話しかけようかと内心戸惑っていたら、カートにうつ伏せてた 60 代女性が顔を上げ、隣りに人が座っているのに気づき、前を向いたまま「今日は天気がいいですね」と言った。70 代女性は 60 代女性の方に顔を向け「そうですね」と答えた。その後も、百貨店の催事や世間話で二人の間で会話が弾む。



つ伏せてた 60 代女性が顔を上げ、隣りに人が座っているのに気づき、前を向いたまま「今日は天気がいいですね」と言った。70 代女性は 60 代女性の方に顔を向け「そうですね」と答えた。その後も、百貨店の催事や世間話で二人の間で会話が弾む。

図 4.2 事例 2

人との交流を積極的に求めるのでもなく、しかし自分にふってきた刺激には反応する。70 代女性の人の流れを繰り返し目で追うふるまひは、一方的なふれあいであるとも、女性が他人や外部社会に関心を向けていることを表している。70 代女性にとってここは人の流れを見る目のふれあい、人に話しかけたり話を聞いたりする耳のふれあい、およびそれら控えめなふれあい以上の会話というコミュニケーションが生じる場所となっている。一方、60 代女性は眩いても誰かが反応してくれる、または不審がられる心配もなく、その場で言葉を発した。女性が居眠りすることも含め、女性にとってここは自由気ままにいられる場所であろう。

・事例 3 「居座る」大丸地下休憩所 2016.11.16 15:20-



向かい側の椅子に深く腰かけた 70 代の男性。両手を軽く太もも上のカバンに寄せ、ゆっくりと目を閉じ、ゆっくりと頭を壁につける。上半身は直立したままそっと壁に預け、頭は少し上を向いた姿勢で休憩している。今日は人通りがいつもと比べて少

図 4.3 事例 3

ない。休憩所の椅子は多く空いていて、男性の両側の椅子も空席である。約 10 分の間、男性は姿勢を変えずに休憩していた。10 分ちょっとすぎると、男性は目を開け、カバンを手にその場を去った。

男性がここでこのように居座ることは、休憩の意味と、この場所に平穏を感じたことを表すのではないか。男性のゆっくりと目を閉じゆっくりと上半身を壁に預ける一連の動作と、一連の動作のあとで目を閉じ顔を上向く無防備な姿から、男性にとってここは安心して身を預けて休憩できる場所であると考えられる。

以上の結果と考察から、「天神地区で高齢者がこのように活動している」といった、今まで見過ごされがちであった「明確な目的にならない活動」の存在を裏付けることができた。活動を含めて天神地区で活動する高齢者の姿を改めて見ると、高齢者が天神地区で多様な活動をしている姿が見られる。「なぜ高齢者が都心部の街で元気に活動できるか」という問いに対して、「都心部の街には多様な活動や豊かなふれあいがあるからである」との答えが見えてきた。

5. 結果と考察Ⅲ

研究課題 Q3 「都心部で活動する高齢者の姿から何が見えるのか」

## 5.1 課題説明

高齢者の活動場面から一步引くと、高齢者の活動の場には高齢者だけでなく、観察者も含めその場に大勢の他者がいる。活動自体とは一見無関係であるが、高齢者であれ他者であれ、その場にいることには意味がある。都心部の街で活動する高齢者の姿は、他者の目ではどのように映っているのか。前章の高齢者の活動場面に加え、本章では「居方」という概念を用いて都心部の街における高齢者の活動の姿を再考する。

## 5.2 関連研究

「居方」とは、ある場所に人が居るときの様子、そのときに周囲の環境や他者にとっての関係である(鈴木, 1993)<sup>6)</sup>。また、他者と環境の関係は観察者自身の環境認識の重要な材料を提供している(鈴木, 2003)<sup>7)</sup>。その人の居方は観察者である私に場面を見させるだけでなく、観察者への環境認識ともなる。ある人がある場所に居ることは、他の人にとっても意味があること。その意味とは他の人にとって、ある場所を認識する手がかりとなる。つまり、都心部で活動する高齢者の姿から都市を認識できるのではないか。

## 5.3 結果と考察 まとめ

「居方」の知見をふまえて、再び前章の観察場面の事例を取り上げて解釈する。四章にて事例1は、女性にとって「刺激的な体験を提供し、買物の醍醐味が味わえる場所」と解釈した。他者からすると、女性のこのような居方からこの場所で意味ある体験ができる刺激的であるところと認識できるのではないか。都心部の街では常に新しいものや刺激的なものであふれている。これらの新奇さや豊かさを、このような都心部の街ならではの体験をする高齢者の居方から再認識できると考えられる。事例2には高齢者にとってその場所は「控えめなふれあいとそれ以上の会話というコミュニケーションが生じる場所」や「自由気ままにいられる場所」と解釈した。見知らぬ人と気軽に話す場面、高齢者のその居方からも、その場所がもつ自由さや気軽さ、開放性を認識できるのではないか。そしてその場所は高齢者のこのような居方によって、開放的な社交場所ともなる。事例3では男性の居方からこの場所の平穏やのどかさが認識できる。これらは他者が単純にその場所を見て感じたのではなく、男性がのんびりする姿を見て、その居方を通して見えたものである。

「居方」という概念を用いて高齢者の活動と都市の関わりを考えると、都心部の街における高齢者の活動の姿、つまり高齢者の居方が都市を認識すること、都

市を都市を見ることに大いなる意味を与えていることが明らかになった。高齢者の居方を通して見出された都心部の街の質は、のどかさ・せわしさ・自由さ・開放・刺激的・平和的等様々あり、また高齢者に対する都市の緩さも見えた。高齢者の居方から都市の豊かさ、都市が見えることである。

## 6. 総合考察

総じて次の結果が見えた：(1) 高齢者は都心部の街を訪れる時の装いをする事で、都心部の街で活動することが特別な意味を持つ「お出かけ」になる。(2) 高齢者は「買物」以上に天神地区で多彩な活動に恵まれている。高齢者の活動を通して、天神地区、つまり都心部の街が高齢者に多様な活動や豊かなふれあいがある場所を提供していることが見られた。(3) 高齢者の居方が都市を認識すること、都市を都市を見ることに大いなる意味を与えていることが明らかになった。高齢者の居方を通して見出された都心部の街の質は、のどかさ・自由さ・開放・刺激的・など様々ある。都心部の街の豊かさや緩さが高齢者の活動を支え、また高齢者の居方は都心部の街を豊かに緩く見せることができる。これらが都心部の街における高齢者の活動と都市の関わりであり、両者は切り離せないものである。高齢者が都心部の街で活動することはどういうことか。高齢者にとっては「お出かけ」という特別な意味を持つこと、都心部の街で多彩な活動ができ楽しめることである。都市に居る他者にとっては、高齢者が都心部の街で活動することから都市の質を再認識できることである。つまり、「高齢者の居方から都市が見える」こととなる。若者中心と捉えられがちな都市の中心部において、高齢者の居方から都市ののどかさ・自由さ・開放・刺激的という都市の場所性を浮かび上がらせた。

## 参考文献

- 1) 国土交通省 (2016) 都市計画運用指針, 第8版.
- 2) 中鉢奈津子 (1998) 京都市における高齢者の外出行動, 人文地理, 人文地理学会, 50巻2号, pp. 172~187.
- 3) 内閣府 (2017) 平成26年度高齢者の日常生活に関する意識調査結果.
- 4) 宮崎勲・青木正夫・上和田茂・船越正啓 (1992) 脱地域型高齢者の都心商業地区における散策的余暇活動の実態—都市高齢者の余暇活動の再編成に関する研究, 日本建築学会大会学術講演梗概, pp. 573~574.
- 5) 橋弘志・高橋鷹志 (1997) 地域に展開される高齢者の行動環境に関する研究—大規模団地と既成市街地におけるケーススタディー, 日本建築学会計画系論文集 497号, pp. 89-95.
- 6) Jan Gehl (2006) Life Between Buildings: Using Public Space, The Danish Architectural Press, Copenhagen. (ヤン・ゲール著, 北原理雄訳 (2016) 建物のあいだのアクティビティ, 鹿島出版会)
- 7) 鈴木毅 (1993) 人の「居方」からの環境デザイン—1—都市のオープンスペースの「居方」 建築技術, 建築技術 (517), p204-207.
- 8) 鈴木毅 (2003) 居方 人の居る場面に含まれるもの、あるいは環境としての他者. (高橋鷹志+チーム EBS「環境行動のデータファイル 空間デザインのための道具箱」, 彰国社)